

深田祐介

ガ
ル
ー
ダ

神
鷲
商
人

上

新潮社



ガ
ル
ー
ダ
神鷺商人
上

深田祐介

新潮社

ガルーダしようにん
神鷲商人 上

著 者 深田祐介（ふかだゆうすけ）

昭和六十一年十一月二十日発行

昭和六十二年二月十日四刷

発行者 佐藤亮一

印刷所 二光印刷株式会社 製本所 大日製本株式会社

発行所 郵便番号一六二
東京都新宿区矢来町七十一番地

株式会社 新潮社

電話 業務〇三(266)五一一一 編集〇三(266)五四一一

定価 一二五〇円 振替 東京四一八〇八

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

上・目次

プロローグ

5

運命との邂逅

17

国^バ父^バと呼ばれるひと

61

熱帯夜の闘い

153

真白き薔薇

242

下・目次

大統領夫人

恋と死の狭間

九月三十日事件

エピローグ

神鷺商人

上

プロローグ

東京駅の八重洲口くらい、戦後の変貌の激しかった土地もないだろう。

八重洲口は戦前、丸の内口に対して、裏口と呼ばれ、もともとは通勤ラッシュを緩和するために設けられたものだが、敗戦直後の八重洲口は裏口以下であった。当時の八重洲口の駅舎は、今日では山間の駅にもまず見られない、改札口ひとつかふたつのお粗末なバラック建てで、すぐ傍らに外堀の水が、スモッグに縁のない澄んだ青空を映しとっていた。

八重洲口が俄かに活気づくのは、昭和二十九年十月、八重洲口改築にあたって、大阪大丸デパートが、国鉄の「民衆駅」建設企画に参加、八重洲口駅ビルの八千坪を借りて商売を開始してからである。同時に、青空を映していた外堀が埋められて、国際観光会館と、そして第一鉄鋼ビル、第二鉄鋼ビルが建てられてからである。

鉄鋼ビルの名前でわかるとおり、この八重洲口から日本橋の向う側、八丁堀にかけては、鉄鋼関係会社のビルが多く、一種の集落を形成している。江戸時代、与力同心の住んだ町、八丁堀は、第一次大戦後、鉄鋼材の激しい値動きに刺激された鉄材問屋の番頭たちが独立して、ここに店をかまえたので、その歴史が現在まで名残りを止めているのである。

昭和三十二年十一月のある昼前、八丁堀の古ぼけたビルの前で、ひとりの男が人待ち顔に立って

いた。

古ぼけたビルは、四階建てで、屋上に「岩下商店」という、おおきな看板がかかっている。ご多分にもれず、岩下商店も鉄材問屋から出発した商社で、男は岩下商店の秘書役、島村秀雄であった。島村はすでに四十歳を越していて、岩下商店社長、岩下悟の番頭役を自任している男だが、今日の彼は、道路の左右へ眼をやって、態度が落ち着かなかった。

島村は趙志潭^{ちようしたん}という、インドネシアに国籍を持つ中国人貿易商を迎えにでているのだが、趙とは面識がない。すぐに見分けがつくかどうか、不安であった。

趙志潭は、インドネシアの貿易会社、ハマディアの日本首席駐在員だそうで、なんでも戦時中は日本の対華工作、対インドネシア工作に従事し、戦後は日本、インドネシア間を中心に貿易に従事している、という。

趙の会社は、インドネシアの屑鉄回収の話を岩下に持ちこんで、下請けをやったことがある、という話である。

こういう趙の経歴から、島村はなんとなく中華料理を食べ過ぎて、でっぷり肥った、いかにも華僑然とした人物の出現を想像していた。

まもなく米国製の黒塗りの車が岩下商店の前に停り、運転手がドアを開くと、髪をきちんと七三分けた、四角い顔の細身の人物が降りてきた。

想像していた人物と全然違う男が現れたので、島村は一瞬戸惑ったが、おもいきって、

「趙さんでいらっしゃいますか」

声をかけると、四角い顔の男は、愛想のいい笑顔をうかべ、

「趙でございます」

訛^{なま}りのある、かん高い声で答えた。

色白、細身の容姿といい、中空に浮んだ三日月みたいな眉といい、華僑の大物という感じはなく、いかにも軽量級の人物という印象を与える。「のっぺりした」という形容がふさわしいような感じが、島村は後年、テレビ界のスターになった植木等という俳優をみると、その度に趙にそっくりだ、とおもったものである。

「社長の岩下は、近くの岩下の寮で、お待ち申しあげております。私のご案内致します」

島村はそういつて、米国製の車の助手席に乗って、八丁堀の奥、亀島川のほとりにある岩下商店の新川寮に案内した。

新川寮は、戦時中に疎開した医者 of 自宅を岩下が買って、戦後、社外の接待や社員の集まりに使っている場所で、洋風の屋根が三角形に空に浮きでているところから、社員たちは「三角屋敷」と呼んでいる。

三角屋敷では、先行した常務ふたりが待ち受けていて、趙を招じ入れ、応接間に案内した。

「社長、ご無沙汰しております」

趙はにこにこ愛想よく岩下商店の社長、岩下悟に挨拶した。

応接間の椅子から立ちあがった岩下悟は、この年、五十八歳、新派の柳永二郎に似た顔立ちの人物である。ずんぐりとした体格で、こちらのほうが中国服の似合いそうな華僑タイプである。

小学校高等科を出ただけで、鉄鉱石の卸し問屋に小僧奉公した岩下は、昭和七年独立をして、やはり鉄鉱石の卸し問屋、岩下商店を設立した。資本金わずか五十万円、社員五名の零細会社であった。

創立当初から、岩下悟は、のちに鉄鋼業界というより日本財界の大物になる八幡製鉄の稲山嘉寛や富士製鉄の永野重雄と親交を結び、彼らの庇護下に八幡、富士両製鉄会社の輸出入問屋として指定を受け、急成長をした。

戦後まもなくフィリップス、マレーの鉄鉱山の開発輸入に乗り出し、日本鉄鋼業界の死命を制する、海外鉄鋼原料を握って、岩下商店はこの戦後十年間に資本金三億円、最大の鉄鋼専門商社に躍進した。最近鉄鉱石の卸し問屋から、鉄鉱製品、木材、繊維、肥料、建築資材、機械へと事業を急テンポで拡大しつつある。

お茶をすすって一服すると、趙は愛想笑いを絶やさずに、

「社長、今日はインドネシアのスカルノ大統領から頼まれて、伺ったんです」
かん高い声で、切りだした。

戦時中から日本人と接触してきたためだろうが、趙は達者な日本語を話す。

「スカルノ大統領はね、今、とても困っておられます。そこで私に相談があったんですよ」
趙はいくぶん得意気な表情でいい、一座の者を見まわした。

軽量級の男が背伸びをして、大言壮語している感じで、島村は違和感を覚えた。

しかし岩下悟は、「ほう」と素直に受けている。

「ご存知のように、インドネシアは一万三千の島からできている国ですが、この島の間の輸送は、オランダの船会社が請け負っていたんです。それがね、今度引き揚げてしまった。それでインドネシアには船がなくなりました」

「ご存知のように」と前置きしながら、お前たち、知らないだろうという、見下したような表情で、趙は説明をする。

太平洋戦争終結直後の昭和二十年八月十七日、インドネシアは独立宣言をしたものの、その直後、復権を目指す旧宗主国オランダと独立戦争に入った。

一九四九年、昭和二十四年にオランダとの独立戦争を終結、主権国家として独立を果たしたが、オランダとの抗争はその後尾をひいている。

この昭和三十三年、インドネシアは自国内に残るオランダ資産の接収を行った。その報復として、オランダはインドネシア諸島間の運航にあたっていた貨客船七十五隻を引き揚げ、シンガポールで競売してしまった。

「船が一隻もなくなったので、島と島との間の連絡が取れない。ボルネオ島やセレベス島で獲れた農産物を首都ジャカルタのあるジャワ島まで運べないんです。このままじゃ、経済が混乱してえらいことになります。国内じゃ軍人と政党が反乱を起していますし、スカルノ大統領もほんとに苦しい立場なんですよ。それからこれも大事なことですけど、インドネシア人の九〇パーセントはイスラム教徒で、毎年船を仕立てて、イスラムの本山のメッカまでお参りにゆく習慣なんです。だけど、そのお参りのための船もないんですね」

趙は、三日月型の眉をもっともらしく寄せ眼を伏せて、いかにも深刻な顔をしてみせた。

「そこで、スカルノ大統領は、私を呼んで、おまえ、どこか日本の会社にあたって、船を売ってくれるところを探してこい、こうおっしゃったんですよ」

趙はそこでひと呼吸入れて、

「私は、こういうね、男が意気に感じるような仕事はね、三井、三菱なんかつなに繋いだって駄目だ、腹のある、スケールのおおきい岩下さんに持ちこまなくちゃ駄目だ、そうおもって、今日、ここにきたんですよ」

恩着せがましくいう。

「今年の六月、岩下商店が創業二十五周年の記念式典をおやりになった。あのとき、私も寄せさせて貰ったが、岩下社長はスピーチをされて、商売するからには、取りひき先の将来を考えることが大事だ、取りひき先の将来のありかたを考えて、これをホヒツしてゆく、難しい言葉で私にはわからなかったですけど、要するに取りひき先を助けてゆくのが大事だ、と話された。私はあのスピー

チに惚れこんでおるんです」

趙の弁舌はいかにもさわやかで、調子がいい。

こんなうすつぺらな、三日月眉のはねあがった男に、スカルノが軽々しく国家の一大事を打ち明け、船舶の調達を頼んだりするものだろうか。趙という人物にも、趙の持ちこんできた話にも、島村は信頼が置けない気がした。

趙は、

「スカルノ大統領は取り敢えず、三千トン前後の船を十隻、至急、売って貰えないだろうか、そういつておられるんですよ、たとえ中古船でも、動いてね、貨物が運べればいい、とおっしゃっているんです」

岩下悟をじつとみつめて、いった。

岩下悟は、島村の不安とはおよそ裏腹な反応をした。

関西訛りを響かせて、

「おもしろい話やないか」

と呟いたのである。

岩下悟のこのひとことが、戦後の日本とインドネシアの関係を発足させるキイ・ワードになったのである。

「インドネシアのためにひと肌脱がなあかんのやないかね」

岩下は、ふたりの常務を顧みて、

「きみら、早速、船を探してくれんか」

と命じたのである。

趙はわが意を得た、という表情になり、

「社長はインドネシアにとってガルードみたいなかたですな」

といった。

「インドネシアには、なにか困ったことが起ると、ガルードというね、驚の恰好をした神さまが出てきて救ってくれる、という伝説があるんですよ。ヒンズー教からきてる伝説なんです、社長はその驚の神さまだ」

奥の座敷で食事を終えて、趙は帰っていったが、趙が引き揚げてゆくと、ふたりの常務が岩下悟に詰め寄った。

「これは危険な商売ですよ、社長。今のインドネシアは借金だらけの貧乏国です。対日負債だって、たしか一億八千万ドル前後に上る筈ですしね、内政上もスマトラに反乱が起っていて、ひどく不安定という話ですよ」

「船十隻の商売といえば、二十億や三十億円にはなるでしょう。もしインドネシア政府が支払えなけりゃあ、うちの会社が、この金を抱きこむことになる。冒険過ぎやしませんか」

しかも話を持ちこんできたのが、なにやら信用し難い第三国人なのである。

「これは三井や三菱が鼻もひっかけなかったんで、こちらにたらいまわされてきた商売じゃないですか」

「三井、三菱が鼻もひっかけないところがつけめかも知れんで」

岩下悟は、まぶたの厚ぼったい眼を空に放って、いった。

「忠臣蔵に天野屋利兵衛という、義侠心に富んだ男がでてくるわな。たまにはあの天野屋利兵衛みたいな、他人の危機を救ってやる商売をせんとあかんのやないか」

ほそつといった。

「それにリスクを避ける方法がないわけやない」

視線をふたりの常務に返した。

「賠償や。インドネシア賠償にこの話を繰りこんで貰うのや。そうすれば支払い先は日本政府になるから、リスクはいっさいなくなる」

岩下悟が日本最後の政商といわれるゆえんは、政界との縁が強く、特に昭和三十二年当時の岸政権とは極めて関係が深かったせいである。

岩下商店設立は、日本の満州進出と軌を一にしていたから、岩下は満州で鉄鋼製品の販売に従事、このとき満州国政府実業部次長であった岸信介の知己を得た。

太平洋戦争開戦後、岸は東条内閣の国務大臣兼軍需次官に就任、岩下は岸のおかげで、統制経済下を巧みに生き延びる。

戦後、岸信介はA級戦犯に指名され、巣鴨刑務所に収容されたが、昭和二十三年、岸が出所をすると、岩下は巣鴨まで岸を迎えに行った。出所後は公職から追放されて、収入のない岸のために、日本鋼材商事という会社を設立、岸を社長に据えて、経済的な援助を惜しまなかった。

趙志潭が岩下を訪ねてきてまもなく、首相に就任していた岸信介は、東南アジアを歴訪、インドネシアでスカルノとトップ会談をして、暗礁に乗りあげていた賠償交渉を一気に合意に持ちこんだ。岸としては、まだ弱体な政権の基礎固めとして、対インドネシア賠償の交渉という実績を示したかったのである。

岩下悟には、正に好機が到来したわけで、岸との関係を活用、精力的に動き始めた。

この年、昭和三十二年の暮には、趙志潭を伴って、箱根の別荘で静養中の岸信介を訪ね、インドネシア向け船舶の商談が起っていることを話し、この件を賠償に繰りこむように要請をする。

翌三十三年一月に、岸政府は外相藤山愛一郎をジャカルタに送って、日本インドネシア平和条約

ならびに賠償協定に調印、二月にはインドネシア大統領スカルノが戦後初の非公式訪日をしたが、趙志潭の仲介で、岩下は四回にわたって、スカルノを築地の新鶴築、山口などで接待をした。

さらに二月十四日には、俳優長谷川一夫が赤坂で経営する料亭「賀寿老」で、岸信介、スカルノ、岩下の三者会談を持ち、船舶売買を賠償に繰りこむ、最終的な打ち合わせをした。

岩下の政治力は強烈な効果を發揮して、この夏に第一次インドネシア賠償の入札結果が公表されてみると、十隻の船舶賠償のうち九隻を岩下が受注したから、賠償はほぼ岩下の独占状態となった。十隻全部を独占することもできたが、世論に対する「風穴」として一隻を日綿実業に譲ったのである。

政治工作に物いわせて、岩下は商権を獲得すると同時に、いわばインドネシアに対して「恩を売った」かたちになった。

岩下商店の機械輸出部の課長、棚橋浩治が、スカルノの愛人、川瀬瀧子を見かけたのも、その頃のことである。

通産省から八丁堀の岩下商店に戻ってきた棚橋がエレベーターに乗ろうとすると、入れ違いにこの古ぼけたビルに不似合いな、はなやかな和服姿の女が降りてきた。

均整の取れた姿態の持ち主で、髪型や化粧が美容院から出てきたように整っており、着物の着つけも素人離れしていて、水商売の女のようにもある。

それにしておおきな目や厚目の唇のあたりにおっとりした、育ちのよさがうかがわれ、棚橋は何者だろう、とおもった。

女のあとから、中年の男と社長秘書の島村秀雄がでてきた。

秘書役の島村は、棚橋をみとめ、

「ちょうどいい。あんたを紹介しておこう」

といい、

「豊中さん」

前を歩く中年の男を呼び止めた。

呼び止められた男は、中背、小肥りの男である。

「この男は棚橋君といいまして、機械の課長です。賠償の商売にも嚙んでいて、ホテルのほうをやっているんです」

小肥りの男に棚橋をひき合わせた。

「豊中さんは、戦時中、インドネシアのバタビア（ジャカルタ）の副領事をやっておられてね、今までは法務省の出入国管理局におられたんだが、この四月に退官されて、岩下商店に入社されることになったんだ。今日社長との打ち合わせで、ジャカルタ支店長として、早速赴任されることに決ったんだよ」

豊中という男は、役人らしからぬ、いかにも打ちとけた笑顔を見せて、

「いやあ、私はずっと役人をしてきましたんでね、商売は皆目わからんのですよ。よろしくご指導ください」

頭を掻きながら、挨拶をした。

「それから、そちらは」

と島村は和服の娘を指し示して、

「豊中さんのお嬢さんの家庭教師として、ジャカルタにゆかれる川瀬瀧子さんだ」

和服の娘は丁重に頭を下げた。家庭教師にも、いろいろなタイプの女性がいるものだ、と棚橋はおもった。

ふたりはそのまま玄関に向ったが、島村は棚橋の耳に口を寄せ、